

「偉大さ」のもたらす功罪

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

思想と実践における力強さ

アルベルト・シュヴァイツァー (1875-1965) は偉大な思想家であり、実践家だった。

彼はつねに力強い語り口で哲学や神学を論じる。彼の前にはなんのドグマも権威もない。彼は、いったん思想の核心をつかむや、譲歩や妥協をせず突きすすんでいく。思うに、彼の叙述にみなぎる力強さは、自らの許に「真理」が存在するという確信から来るものだ。そして生命への畏敬こそ、あらゆる思想の思惟必然的な到達点としてつかんだ彼の真理であった。彼の死後、膨大な原稿が残されたが、その内容は、彼が自らの生命への畏敬の思想を、人類の精神史全体の中で位置付けようとする壮大な試みなのであった。

実践面においても、シュヴァイツァーは常に自分の信念に基づいて突きすすんだ。いったんアフリカの黒人のための医師になると決心するや、周囲の反対を押し切り、学問や芸術のキャリアを投げ捨てることに躊躇しなかった。そして、熱帯雨林のただ中に自らの病院を独力で建て、半世紀にわたりそれを運営してきた。この間、病院は増え続ける黒人患者のために拡充を続け、彼の最晩年には 80 棟もの建物が立ち並び、さながら一つの村ようになっていた。

思想研究において力強さを感じさせたものが、ここでもおおいに発揮された。ただし、観念の世界でドグマや権威を排した人間は、実践の現場ではその偉大さの故に、今度は自らがドグマや権威となってしまった。ランバレネの病院はどんなに巨大な病院になろうと、シュヴァイツァーの「個人病院」であり、彼の存在なくしては何事も立ち行かないのだった。それゆえ、絶対的な権威者である彼の下、万事が彼の流儀で行われなければならない。

偉大な専制君主の「悲劇」

シュヴァイツァーがその病院でいかに王者か専制君主のごとき存在であったかは、数多くの証言がある。彼の存在には強力な磁力があったが、その態度は彼への服従を要求するものだった。白人の医療スタッフが病院の管理運営に口出しするのは一種のタブーだった。彼はときどきスタッフを厳しく叱りつけることもあった。彼らはその後、悔俊の情をあらわに示し、それはまるでキリストを失望させた弟子たちが取るような態度だったという。

病院では夕食後に礼拝があった。牧師でもあるシュヴァイツァーは自らオルガンを弾き、簡単な説教も行った。けれども、彼が自室に戻ったあとの雑談では、院長 (シュヴァイツァー) への批判や悪口がひそひそとかわされた。医師たちの中には、旧態依然とした病院のあり方や病院での自分の立場に不満をいだく者も出てきた。その一方で、女性秘書や看護婦たちは、この偉人に心から忠誠を誓い、彼に気に入られようと互いに競争しているように見えた。当人たちにしてみればそうではないと言うだろうが、大事なものはそのように「見えた」ということであり、それがために病院スタッフの士気を低下させていたのは事実であった。

このような雰囲気の中では、人間関係は長続きするものではない。事実、女性スタッフが比較的長期滞在したのと対照的に、男性医師には早々と引き揚げていく者が少なくなかった。

シュヴァイツァーは 1965 年 9 月に亡くなるが、彼が昏睡状態に陥ったときから、早くも主導権をめぐる争いが始まっていた。当時、病院の後継者と目されていた彼の娘レナ夫人が病院に来ていた。白人スタッフは、だれもかも彼女に取り入ろうとした。しかし、彼の没後 2 年もしないうちに見切りをつけ、病院からほぼ全員が去っていった。彼らをここにとどめる磁力が失われたのだ。これはまさに「悲劇」だった。1970 年代には、シュヴァイツァー病院の閉鎖も取り沙汰されたほどだった。そうならなかったのは、この病院が現地の人々にとって既になくしてはならない病院となっていたからである (その後シュヴァイツァー病院は近代化され、ガボン共和国の枢要な病院として現存している)。

偉大さゆえの功罪

なぜ、そのような悲劇が起こってしまったのか？

シュヴァイツァーにも、人間なるが故のさまざまな欠点がある。しかし、そのような欠点はたいして問題ではない。逆説的な言い方になるが、彼があまりに傑出した大人物なるがゆえの悲劇であったのだ。病院のあらゆる運営面において、彼は理念的にも実質的にも中心的存在であり、病院全体に彼の人格が刻印されていた。ある意味、病院のためにシュヴァイツァーがいるのではなく、シュヴァイツァーのために病院があるがごとき有様になっていた。

そもそも、弟子というものは、師匠が偉大な存在であればあるほど、その人格に圧服されてしまい、その崇拝者、追従者になってしまう傾向がある。また、そういう偉人だからこそ、弟子になりたい者が集まり、そして結局、彼らの多くは単なる崇拝者、追従者になってしまうのである。また、偉大な指導者であればあるほど、彼に気に入られようと汲々とする人間を大量に生み出してしまふ。そして、自ら精神的に独立不羈であればあるほど、その周囲に彼に頼る精神的依存者を数多く集めてしまふのである。

シュヴァイツァー病院で起こった人間模様の悲劇も、そのようなものだったのではないだろうか。しかし、スタッフの主導権争いが彼の死後も果てしなく続いていたら、もっと悲劇的であっただろう。そうなれば、時代に合おうが合うまいが、とにかく正統である (シュヴァイツァーの思いに忠実である) ことばかりをお互いに言い立てる競争ばかりが続き、事業は時代から完全に取り残され衰滅したことであろう。

どんな人間の組織や集団であれ、偉大な指導者亡き後は、常にこうした危機をはらんでいる。その危機は既に彼が存命のうちに懐胎されているのである。宗教教団として例外ではない。いや宗教教団こそ、師と弟子の間でそうした危機が最大となりうる人間集団なのである。しばしば、教団人の少なからぬ者は、自らの信仰を直接神仏などの超越者ではなく、偉大であるが一人の人間にすぎない指導者の権威のほうに依拠してしまう。そこに宗教において、人に教えを請うことの一つの危うさがある。だからこそ、前号で述べたように、自らの自信が感化を与え、人にも (その人なりの) 自信を持つように教えるという意味での「自信教人信」の精神がいつそう求められるのである。